青年期の親準備性に関する研究

○岩田　崇（慶応義塾大学小児科学教室）
秋山泰子（　〃　）
井上義朗（東京学芸大学児学）
深谷和子（　〃　）

(1)　「親準備性」とは，本研究においてはじめて設定された概念であり用語である。これは望ましい親行動の遂行に必要な，プレ親期（青年期）における，価値的・心理的態度や，行動的・知識的側面の準備状態を意味している。具体的には，望ましい結婚生活と育児行動を成立・維持させるような，異性観，結婚観，性役割観にはじまり，子どもの受け入れに関わる態度（親としてのアイデンティティの準備状態），健康な子ども親や育児知識や技能の習得度など，多くの領域から構成されると考えられる。

若者は人生の途上で必ず親となる。しかし望ましい育児行動を展開させるために，「親準備性」をどう形成させるかが，今後の大きな社会的問題となるだろう。

(2)　こうした見地から本研究は，今日の青年層の中の親準備性の形成状況を探るために，アンケート調査を実施した。サンプルは大学生1,462名，高校生1,176名。大学生は国立私立の一流校，高校生は公立の進学校（共学）で，現代の若者層の中では上層に属する者たちとみてよいだろう。調査時期は昭和５６年から５７年にかけてであった。

(3)　現代の若者たちの性意識はかなり積極的で，結婚を前提としない性交渉については，大学生男子７４.４％，女子３５.９％，高校生男子５２.０％，女子３１.３％がこれを肯定している。しかしその割に現実の異性接触は貧弱で，「両思いの相手」を持つ者は，高１で男子7.５％，女子１１.７％，高３で１４.５％と２５.９％，大学２年生で２４.２％と３７.２％，４年生で４０.５％と４４.９％。年令と共に増加はして行くものの性交渉はむろんのこと（性体験の所有者は大学生で男子２９.４％，女子２２.４％，高校生で2.９％*と4.５％）デートとよばれる接触のしかたもきわめて貧弱にしか体験されていない。

*高校生の場合，教育的配慮からラブホテルへ行くという表現で調査したので若干数値が内輪かもしれない。

(4)　しかしこの層の若者たちの，子どもの受け入れや性役割観を中心とした親準備性は，比較的十分に形成されてみてよいだろう。彼らの予測する結婚生活には，比較的十分に子育てのプログラムが組み込まれており，自分の手で（保育所や親に依存せず）子育てを行おうとする構えがある。

(5)　しかし自分の手で子育てをする構えは女子の方に一段と稀薄で，子どものある離婚にも積極的な構えを示し，男子との間に意識のくい違いが見出される。

(6)　本サンプルの場合，乳幼児期に保育所で育てられた生育歴を持つ者は僅少（乳児期に１％，幼児期に７～８％）であり，小中学校でカギッ子経験をもつ者も２～３割に過ぎない。しかしカギッ子経験者，すなわち成長してからにせよマターナルデプリベイションの状況下にあった者は，自分の親に対する同一化が弱く，とくに父親の受け入れが悪くなる傾向があった。

(7)　このように，現代の中の上層以上の高校生たちは，将来の親行動への望まれる構えを，一応形成しているとみてよいだろう。しかしそうした彼らでさえも，自分の親にとって，自分や他のきょうだいの「子育て」は，父親にはむろん母親にも生きがいの一部にしか過ぎず，したがって将来の自分の結婚生活でも，育児行動の一部を簡略化しても，自分たちの生活をエンジョイする時間を生み出し，自分の生活と育児を両立させて行こうとする構えをもっていることに，留意しなければならない。

(8)　今後に残された課題としては，現代青年層の多数を占める中および中の下層の若者たちの意識と行動を探り，親準備性の形成上の問題を明らかにすること。また親準備性の形成不全に対する対応と，幼児期からはじまりプレ親期に至るまで

どうすべきか，その教育の方策を見出すことであろう。

思春期精神遅滞児の親子関係

目的：思春・青年期の精神遅滞児をもつ親の気持と将来計画について調査を行い，青年の親準備性調査の資料とした。

調査内容：ＩＱ５０未満，養護学校生男７８，女３７，計１１５名の親へのアンケート調査。結果は以下の通り。(1)～(3)は複数項目解答である。

(1) 子供の二次性徴を迎えた時の気持

心配７１，喜び２３，嫌悪１３，驚き１２，無答９，３名の親は４項目の気持ちがあったと記し親の心性の複雑さが察せられた。

(2) 子供の成長の楽しみがあるか

大いにある６７，少しある４６，大いになし３少しなし５

(3) 大人になってほしいと思うか

いつも思う５７，時々思う４３，いつも思わぬ６，時々思わぬ１０

(4) 卒業後の進路について

福祉作業所４１名３６％，理解ある一般企業３５名３０％，施設１６名１４％，生活訓練所１６名１４％，在宅７名６％

(5) 結婚について

とても考えられない５３名４６％，適当な人がいたらさせたい３２名２８％，どちらともいえない３０名２６％

(6) 将来子供を誰が面倒をみる予定か。

親５４名４７％，兄弟・親類３８名３３％，自立１０名９％，施設長７名６％，まだ考えていない６名５％

結語：重度精神遅滞児の親子関係は，子どもの独立の見込みが薄いという現実に立脚している。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

(1)「親準備性」とは,本研究においてはじめて設定された概念であり用語である。これは望ましい親行動の遂行に必要な,プレ親期(青年期)における,価値的・心理的態度や,行動的・知識的側面の準備状態を意味している。具体的には,望ましい結婚生活と育児行動を成立・維持させるような,異性観,結婚観,性役割観にはじまり,子どもの受け入れに関わる態度(親としてのアイデンティティの準備状態),健康な子ども親や育児知識や技能の習得度など,多くの領域から構成されると考えられる。

若者は人生の途上で必ず親となる。しかし望ましい育児行動を展開させるために,「親準備性」をどら形成させるかが,今後の大きな社会的問題となるだう。